

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 17 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370463

研究課題名(和文)v-システムに関する言語・方言横断的および通時的研究

研究課題名(英文)A cross-linguistic, cross-dialectal and diachronic study of the v-system

研究代表者

青柳 宏(AOYAGI, Hiroshi)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：60212388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本課題研究で明らかになったのはつぎの点である。(i)共通日本語および東北・北海道方言の述語形成には、語根(Root)と複数の機能範疇主要部(v, Applicative, Causative, Voiceなど)が関わっている。(ii)文法化には、語彙範疇または機能範疇が構造的により高い位置に現れる機能化(functionalization)があるばかりか、逆に語彙範疇が語根化(radicalization)するものもある。(iii)韓国語にも潜在的に多重接辞形が存在する(中期韓国語や慶尚道方言)が、標準韓国語では音韻的縮約が起こり多重接辞が単純化した。また、語根化は進んでいない。

研究成果の概要(英文)：This research project has revealed the following points. (i) In predicate formation in Japanese and its northern variations, more than one functional heads (i.e., v, Applicative, Cause, Voice, etc) together with a Root are involved. (ii) Grammaticalization is bi-directional; it not only turns a lexical or functional category into a functional category that appears in a higher structural position (i.e. functionalization), but it also may, conversely, turn a lexical category to a Root (i.e. radicalization). (iii) As exhibited by pre-Modern Korean and Kyungsang dialects, Korean has potentially allowed multiple suffixation (-Hi-Hi). However, due to phonologically reductive processes, -Hi-Hi has been reduced to -Hi in Standard Seoul Korean. Furthermore, radicalization does not seem to have taken place in Korean.

研究分野：言語学

キーワード：分散形態論 語根 機能範疇 文法化 機能化 語根化 多重接辞 音韻的縮約

1. 研究開始当初の背景

Rizzi (1997)、Cinque (1999)らによる補文標識Cの領域には言語横断的にいくつかの機能範疇の階層が存在するとの主張に始まる言語の階層性を解明する試みは言語地図作製(cartography)プロジェクトとして広く知られているが、近年の研究により、(1)に示すように、時制辞T以下の低い領域にも機能範疇が階層的に存在することが分かってきた。

(1)[TP ... [XP ... [VoiceP ... [YP ... [VP ... [ZP ...
Z] V] Y] Voice] X] T]

たとえば、Borer (2005)、MacDonald (2008)、Travis (2010)、Fukuda (2012)などはVoiceを境としてX、Yの位置にhigh aspect、low aspect(ただし、名称は研究者により異なる)という文の相や事象タイプに関わる機能範疇が存在するとしており、Pykkänen (2000, 2008)やMcGinnis (2001)などはVPを境としてY、Zの位置にhigh applicative、low applicativeというそれぞれ受益、所有権移動に関わる機能範疇が存在するとしている。しかし、日本語とその方言、日本語と類似性を示す韓国語においてT以下の機能範疇の階層性(これを本課題研究では「v-システム」と呼ぶ)がどのような様相を呈するかに関する統一的な見解はいまだ示されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上述の自然言語の階層性を究明せんとする言語地図作製プロジェクトの一環として、v-システムを共時的かつ通時的に追究することにある。この目的を達成するために、まず共時的に(i)いずれも主要部後置型の膠着言語である日本語と韓国語の比較を行い、(ii)共通日本語と東北・北海道諸方言の比較を行うとともに、通時的に(iii)日本語の述語形態の歴史的発達過程を考察する。このように、(i)言語横断的、(ii)方言横断的、(iii)歴史的な研究を通して、多角的にv-システムのあり方を究明しようというのが本研究の狙いである。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、研究代表者(青柳)と分担者(高橋、中島)は互いに連携しながら、各自つぎのような課題に取り組んだ。

課題研究 A(青柳担当)は、日本語と韓国語のボイス、アスペクト、自他交替、複合述語形成などの比較を通して、二言語間の文法化の程度の違いの原因を探った。

課題研究 B(高橋担当)は、共通日本語の受動・可能・自発を表すラレと東北・北海道方言にみられるラサルを比較する一方、二重接辞ラサルを同じ東北に分布する単純接辞 ar と比較検討した。さらに、可能動詞において広範に観察されるラ抜きや「レ足す」という現象にも考察を加えた。

課題研究 C(中島担当)は、日本語古語にみられた受動のル・ラル、使役のシムがどのような過程を経てそれぞれ現代語のラレ、サセ

に定着するに至ったかを解明し、さらに、イタイ>イタム、イタガル等の「形容詞派生動詞」の形成プロセスの究明に取り組んだ。

上記の各課題研究を進める過程において、研究代表者および研究分担者はそれぞれ国内外の学会において研究発表を行い、多数の研究者と意見交換を行った。

また、平成27年11月に格表示の研究者である金銀珠氏(名古屋工業大学)と小林ゆきの氏(筑波科学技術大学)および日本語述語形態の歴史的変遷研究の専門家である釘貫享氏(名古屋大学)を、平成28年7月に韓国語音韻形態論の研究者である伊藤貴祥氏(龍谷大学)を、12月に与論方言研究者の山田まさひろ氏(国立国語研究所)とペルシャ語の軽動詞研究に業績のある菅原彩加氏(三重大学)を、それぞれ招聘してワークショップを開催し、専門的知識の提供を受けるとともに意見交換を行った。

さらに、本研究課題の成果を広く公表するために、最終年度平成28年12月に南山大学において「H26~28 科研費研究成果発表ワークショップ『動詞句とその周辺』」を公開で開催し、研究代表者と分担者は各自の過去3年間の研究成果を発表し、Shin Fukuda氏(米国ハワイ大学)および佐々木冠氏(立命館大学)を外から招聘してご講演をいただき、さらに一般参加者も交え、意見交換と本課題研究の総括を行った。

4. 研究成果

課題研究 A

(1)日韓語の複合動詞の再検討を行った結果、動詞化素vが併合する前に語根同士が併合したものであるとの日本語の「語彙的」複合動詞に関する仮説が韓国語のLow Serialized Verbs (Ko & Sohn 2005)にも当てはまることを示した。

(2)日本語には「XガYニZヲ戻す」のような3項他動詞構文の動詞が自動詞化した「YニZガ戻る」のような二重非対格構文が存在し、後者のYは「自分」の先行詞にはなり得るが尊敬語化は誘発せず、「主語性」に関して相矛盾した性質を示す(Takano 2011)。この事実は、日本語の主語位置が一つではないことを示唆し、「自分」の先行詞となるためには述部(vP)の直上の機能範疇指定部であればよいが、尊敬語化を誘発するためには、構造的により高いSentient(またはHigher Applicative)の指定部になければならないという分析を示した。さらに、韓国語において、3項他動詞は日本語同様豊富に存在するのに対して、二重非対格動詞の生産性が低い理由として、/ar/-系接辞に当たる自動化素が文法化していないためであると考えられる。

(3)動詞の自他交替は日韓両語に観察されるが、日本語では自動詞の受動化(移られ)、他動詞の使役化(移させ)および使役受動化(移らせられ・移させられ)が可能であるのに対し、韓国語では不可能である。この事実を説明す

るために、語彙範疇または機能範疇が機能化する従来の文法化(Haspelmath 1998; Roberts & Roussou 2003)に加えて、日本語には語彙範疇が語根化する逆方向の文法化も存在し、/ar/、/as/が機能化すれば受動、使役の/rare/、/sase/に、語根化すればそれぞれ自動化素/Vr/、他動化素/Vs/になるという、「二方向文法化仮説」を提案した。一方韓国語においては、語根化は存在せず、中期韓国語や慶尚道方言の多重接辞にみられるように機能化は潜在的に存在するが、ソウルの標準韓国語ではアクセントの消失とともに音韻形態的縮約が起こったために接辞が単純化(-Hi-Hi -Hi)したとの説明を与えた。

課題研究B

(1)東北・北海道方言にみられる自発・可能・状態変化を表すラサル(r-as-ar)形式は、自動化素(r)+使役化素(as)+ボイス(ar)の3層の機能範疇主要部からなることを示し、山形・福島方言にみられる自発・可能・受身を表すアル(ar)形式との共通点が、ボイス(ar)が外項に導入する原因項に起因するとの分析を示した。(2)ラサル形式について、先行研究で注目されてこなかった、他動詞目的語が対格を伴って現れる例、非能格自動詞が語幹となる例、接辞arが二重に生起する例を検討し、いずれもボイス主要部が二重に生起するとの仮説の下で説明が可能であることを示した。(3)岩手県在住の成人を対象とした非ラ抜き方言話者に対する質問紙調査を実施し、音節数が揃った動詞群内でラ抜きが適用された場合、自他交替における形態的示唆性がラ抜きことばの容認性に統計的な有意差をもたらすことを明らかにした。

課題研究C

(1)使役のシム(simu)の衰退の原因がその語彙的硬直性にあることを、中国語語源の動名詞(VN)の受容過程から明らかにした。日本語では上代をあまり遡らない一時期、VNを使った[[√VN]-se]-simuと[[√VN]-saseという二つの使役用法が並列した時期があった。やがて前者は後者に道を譲るが、この交替が起こったのはsimuのsが語根であり、接続には必ず先行動詞の未然形を求めるため、サス((s)as)の持つ柔軟性を欠いたからだと考えられる。すなわち[[√VN]-se]-simuと[[√VN]-se]-sase双方が可能であれば、それらを統合する欲求が生まれたが、[[√VN]-se]-saseは和語語根の使役形[[√Root-s]-ase]から類推的に[[√VN]-s]-aseと再解釈されることを許したが、simuは先行動詞に未然形を求めるため、*[[√VN]-s]-imu]を作り得なかったとの仮説を提案した。(2) Nakajima (2011)で論じた使役述語に対する形態分離理論の精密化を図るとともに、その一般的応用性を確かめるために他の複合述語への応用を行った。前者では動詞の自他交替現象の中でも特に問題とされている-eの機能について、自他の交替を決定しているの

は-eだけではなく、-eの生成する項とthemeの持つ一般的特性との関わり合いであることを明らかにした。また非能格動詞の二使役形と非対格動詞のラ使役形の派生を語根の特性と併合の機能により説明した。

(3)形容詞語根による動詞派生を取り上げ、分散形態論でいう動詞化素little vには-kと-mがあり、このうち-kはlittle a(形容詞化素)と同音異義であることを明らかにした。さらに形容詞語尾カルと動詞語尾ガルはどちらもk-ar-uを基底に持つが、動詞派生では構造からもたらされる濁音化現象k→gが引き起こされるのに対し、形容詞派生ではそれが無いことを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

Aoyagi, Hiroshi, On Verb-stem Expansion in Japanese and Korean, Japanese/Korean Linguistics, 査読有, Vol. 24, 2017, 1-14

Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi, The Syntax of Middle Voice in Kesen, Proceedings of the 12th Workshop on Altaic Formal Linguistics: WAFL12 (MIT Working Papers in Linguistics), 査読有, Vol. 12, 2017, (ページ番号未定、12 p.)

高橋英也, 日本語の存在・所有形式におけるイル・アル交替現象, Liberal Arts, 査読有, Vol.10, 2016, 85-100

Aoyagi, Hiroshi, On the Notion of Subjects and Double Complement Unaccusatives in Japanese, Proceedings of the 17th Seoul International Conference on Generative Grammar, 査読有, Vol. 17, 2015, 37-52

Nakajima, Takashi, Reemerge and Causative in Japanese, Proceedings of the 9th Workshop on Altaic Formal Linguistics: MIT Working Papers in Linguistics, 査読有, Vol. 76, 2015, 305-312.

高橋英也・新沼史和, 可能を表すar動詞における接尾辞arの形態統語的役割について, JELS: Papers from the 32nd Conference of the English Linguistic Society of Japan, 査読有, Vol. 32, 2015, 146-152

高橋英也, 日本語の使役起動交替に対する形態統語的アプローチ, Liberal Arts, 査読有, Vol. 9, 2015, 35-48

Aoyagi, Hiroshi, On Serialization of Verbs in Japanese and Korean, Harvard Studies in Korean Linguistics, 査読有, Vol. XV, 2014, 219-231

Nakajima, Takashi, Decompositional Approach

to Japanese Passive, Japanese/Korean Linguistics, 査読有, Vol. 21, 2014, 89-103

〔学会発表〕(計 25 件)

青柳宏、v-System の言語・方言横断のおよび通時的研究、H26~28 科研費研究成果発表ワークショップ「動詞句とその周辺」、2016 年 12 月 17 日、南山大学(愛知県・名古屋市)

青柳宏、On Verb-stem Expansion in Japanese and Korean, H26~28 科研費研究成果発表ワークショップ「動詞句とその周辺」、2016 年 12 月 17 日、南山大学(愛知県・名古屋市)

中嶋崇、膠着現象からみた VP の階層構造、H26~28 科研費研究成果発表ワークショップ「動詞句とその周辺」、2016 年 12 月 17 日、南山大学(愛知県・名古屋市)

高橋英也、可能動詞化の方言上の多様性について：ラ抜き言葉とレ足す言葉の動詞句構造の観点から、H26~28 科研費研究成果発表ワークショップ「動詞句とその周辺」、2016 年 12 月 17 日、南山大学(愛知県・名古屋市)

青柳宏、가
(日韓語動詞語幹増加に関する一考察)、Korean Roundtable (招待発表)、2016 年 11 月 8 日、同志社大学(京都府・京都市)

Nakajima, Takashi, The Mechanism of Transitivity Alternation, the 24th Japanese/Korean Linguistics Conference, 2016 年 10 月 15 日、National Institute for Japanese Language and Linguistics (東京都・立川市)

Aoyagi, Hiroshi, On the Productivity of Verb-stem Expansion in Japanese and Korean, the 24th Japanese/Korean Linguistics Conference, 2016 年 10 月 14 日、National Institute for Japanese Language and Linguistics (東京都・立川市)

高橋英也・江村健介、いわゆるラ抜き言葉の形成における形態統語的制約について、日本言語学会第 152 回大会、2016 年 6 月 25 日、慶應義塾大学(東京都・港区)

Nakajima, Takashi, Weak Head and Its Morphosyntactic Consequences, the 12th Workshop on Altaic Formal Linguistics, 2016 年 5 月 14 日、Central Connecticut State University, New Britain, CT (米国)

Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi, The Syntax of Middle Voice in Kesen, the 12th Workshop on Altaic Formal Linguistics, 2016 年 5 月 13 日、Central Connecticut State University, New Britain, CT (米国)

Aoyagi, Hiroshi, On Verb-stem Expansion in Japanese and Korean, Linguistic Colloquium (招待発表)、2016 年 3 月 18 日、Seoul National University, Seoul (大韓民国)

高橋英也、可能動詞の形態統語論に関する一考察：接辞 e の分布の観点から、日本言語学会第 151 回大会、2015 年 11 月 28 日、名古屋大学(愛知県・名古屋市)

Aoyagi, Hiroshi, On the Notion of Subjects and Double Complement Unaccusatives in Japanese, the 17th Seoul International Conference on Generative Grammar, 2015 年 8 月 8 日、Kyunghee University, Seoul (大韓民国)

高橋英也、東北・北海道方言におけるラサル形式の形態統語論について、南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻主催講演会(招待講演)、2015 年 6 月 12 日、南山大学(愛知県・名古屋市)

中嶋崇、膠着する文法、南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻主催講演会(招待講演)、2015 年 6 月 12 日、南山大学(愛知県・名古屋市)

高橋英也・新沼史和、日本語における接尾辞 ar の文法化と HAVE/BE 交替について、日本語文法学会第 15 回大会、2014 年 11 月 23 日、大阪大学(大阪府・豊中市)

高橋英也・新沼史和、可能を表す ar 動詞における接尾辞 ar の形態統語的役割について、日本英語学会第 32 回大会、2014 年 11 月 9 日、学習院大学(東京都・豊島区)

Aoyagi, Hiroshi, Morphological case-marking in Japanese revisited, Workshop on Korean-Japanese Linguistics at SNU (招待発表)、2014 年 10 月 17 日、Seoul National University, Seoul (大韓民国)

中嶋崇、膠着語の述「語」形成：Decomposition の試み、慶應言語学コロキウム(招待講演)、2014 年 10 月 4~5 日、慶應義塾大学言語文化研究所(東京都・港区)

中嶋崇、A Very Short Introduction to Distributed Morphology, 慶應言語学コロキウム(招待講演)、2014 年 10 月 4 日、慶應義塾大学言語文化研究所(東京都・港区)

①高橋英也、自他交替における接尾辞 ar の文法化について、Morphology and Lexicon Forum 2014、2014 年 9 月 6 日、大阪大学(大阪府・豊中市)

②Fumikazu, Niinuma and Takahashi Hideya, Ar Intransitive as a Complex Verb in Japanese,

Formal Approaches to Japanese Linguistics 7,
2014年6月27日、National Institute for Japanese
Language and Linguistics (東京都・立川市)

②③青柳宏、v-システムについて—日韓語の比
較の観点から—、慶應言語学コロキウム(招
待講演)、2014年6月15日、慶應義塾大学言
語文化研究所(東京都・港区)

②④青柳宏、日本語の助詞と機能範疇について、
慶應言語学コロキウム(招待講演)、2014年
6月14日、慶應義塾大学言語文化研究所(東
京都・港区)

②⑤Nakajima, Takashi, The Demise of Simu, the
10th Workshop on Altaic Formal Linguistics,
2014年5月15日、Massachusetts Institute of
Technology, Cambridge, MA (米国)

〔図書〕(計1件)

Nakajima, Takashi, Deadjectival Verbs in
Japanese, Kunio Nishiyama, Hideki Kishimoto,
& Edith Aldridge (eds.), Topics in Theoretical
Asian Linguistics, John Benjamins, ページ番
号・総ページ数未定, 2019

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

Hiroshi Aoyagi Researchgate:

https://www.researchgate.net/profile/Hiroshi_Aoyagi

Takashi Nakajima Researchgate:

https://www.researchgate.net/profile/Takashi_Nakajima4

Hideya Takahashi Researchgate:

https://www.researchgate.net/profile/Hideya_Tak

ahashi2

6. 研究組織

(1)研究代表者

青柳宏 (AOYAGI, Hiroshi)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：60212388

(2)研究分担者

中嶋崇 (NAKAJIMA, Takashi)
富山県立大学・工学部・准教授
研究者番号：80288456

高橋英也 (TAKAHASHI, Hideya)

岩手県立大学・高等教育推進センター・准
教授
研究者番号：90312636

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()